

『特殊環境で暮らす植物』というコーナーでは、キバナコウリンカやミヤマスカシユリといった典型的な「希少種」に加えて、ホタルカズラやコシオガマ、ナガバノコウヤボウキといった「今のところ」身近な存在といえる植物種も紹介しています。これらの植物は、特定の地質条件や崖地といった地形条件、あるいは増水や浸水による被害を受けやすい場所に暮らしています。そうした場所は、我々の生活の身近にあっては、危険であったり、不愉快な存在であるため、時代の流れとともに姿を消しています。そのために生活の場を追われ、絶滅が危惧されるようになった植物種は数多くあります。



特殊な環境下での植物

私たちの安心・安全・便利な生活。そのために脈々と紡いできた「種」の歴史を閉じさせられる生き物たち。いろいろな考え方・主張があるでしょうが、その前に足もとに暮らす身近な植物の生活をのぞいてみませんか？小さな発見が新しい自然とのつきあい方を教えてくれると思います。

「希少動物の展示」

県産の両生類は15種、そのうち13種が絶滅危惧種です。これほどまでに絶滅危惧の割合が高いのは、水陸セットの良好な生息環境の保全が難しいからだと考えられています。

一方、カメ・トカゲ・ヘビが属する爬虫類は14種、そのうち12種が絶滅危惧種です。もともと種類が少ないうえ、現在は、ペットとして飼われていたものが野外に放たれたとされるアカミミガメ・カミツキガメ・ワニガメが在来種の生息場所を奪うなどの脅威になっています。

「希少種？移入種？」

埼玉県のマスコットキャラクター「コバトン」のモデル、シラコバトは絶滅危惧種にランクされていますが、江戸時代に鷹狩の獲物として海外から持ち込まれたものが野生化した外来移入種であるのではないかと考えられています。昨年度、県の調査では76羽が確認されただけです。

日本では165種の哺乳類が確認されており、埼玉県には57種の記録があります。

小型の哺乳類の中で、埼玉県産のコウモリは32種類が知られ、日本で見られる種類の半数以上にあたります。今回は、鍾乳洞に暮らすコウモリのはく製を間近に見られるような展示をしています。



しっぽクイズ

大型哺乳類の最近の話題は、狩猟圧の減少によるシカやイノシシの増加ですが、単純に増えて喜ばない事情があります。増えすぎたシカが下草を食いつくしてしまうため、希少植物の減少や、食草を失う昆虫に間接的な影響が出るということが、大きな問題になっているのです。

他にも、昨年埼玉で見つかった外来カミキリ（日本で2件目）や、50年前に採集された埼玉産の唯一のオオイチモンジ（タテハチョウ科）



オオイチモンジ

の標本も新たに収蔵・展示しましたのでご覧ください。展示を通して、生物はそれぞれに適した環境が保たれてこそ生息

できるということをお伝えし、身近な自然環境への関心を高めて頂ければ幸いです。

会期は、5月25日まで。春の岩畳観察を兼ねてお出かけください。

(そねざき たけし・担当課長、
かつまた のぶゆき・主事)